

特別賞 三省堂書店賞

『きみの友だち』 重松清著

商学部 2年 山田未貴

クラスの友だち、サークルの友だち、ゼミの友だちにアルバイト先の友だち……。私たちは、たくさん友だちに囲まれている。しかし、その『友だち』は、ほんとうに『友だち』なのだろうか？

本書は小学校から高校までを舞台に、章ごとに別な子どもの視点から物語を綴る短編連作小説集である。しかし、大学生の私たちも、登場人物の誰かには自分自身の姿を見つけ出せるのではないだろうか。

全編を通して物語の重要な役回りをする恵美は、友だちのささいな悪ふざけをきっかけに交通事故に遭い、松葉杖がないと歩くことができなくなった。そして、事故の責任についてもめ、足の自由とともに友だちまでも失う。恵美と、またその弟で成績優秀スポーツ万能なブンのクラスメイトたちを中心に描かれるこの物語の世界には、実にさまざまな子どもたちの姿が、いきいきと描かれる。みんなと仲良くしたくて、特定の友だちを作らず八方美人な堀田ちゃん。ブンと幼馴染で昔は仲良しだったが、あまり賢くなく、どんどんクラスメイトの成長に遅れてゆく三好くん。親友に恋人ができ、都合のよいときにだけ振り回されるようになったハナちゃん。どうしようもないいじけた性格の少年や、転校前にいじめに遭っていた少女、など……。

松葉杖の恵美は、幼い頃から腎臓が悪く入退院を繰り返し『みんな』の中にいたことのない少女由香ちゃんと出会い、また死により失い、本当の『友だち』とは何かを悟る。弟のブンは、なんでも自分よりできる少年と出会い、悔しさを学び、やがてライバルとして、お互いのよき理解者として、親友になってゆく。

私たち大学生の多くも、周りから浮かないよう、誰にも好かれるよう、なるべく自分をよく見せようと振る舞っていると思う。しかし、『みんな』対『自分』、『不特定多数』対『ひとり』のとき、そこにほんとうの『友だち』を作ることは不可能なのである。

——「わたしは『みんな』って嫌いだから。『みんな』が『みんな』でいるうちは、友だちじゃない、絶対に」——(293 頁より)

『みんな』の中に溶け込もうと必死な少女へ、恵美が告げたことばである。私たちは今後、就職をし、結婚をし、『同僚』や『知り合い』は増えても、新たな『友だち』とは出会いづらくなってゆくのではないかと思う。『友だち』とは何か？ 本書は多くのヒントを与えてくれる。周りの『友だち』は、ほんとうに『友だち』なのか。少しでも疑問に思うのなら、学生である今のうちに、ぜひ本書を手に取り、自分自身の姿を探してほしい。